

研究所だより

編集者から

本号では、「住宅ストック」を中心とした構成としております。

住宅ストックに関する統計としては、住宅・土地統計調査（総務省）がありますが、住宅ストックの状況について、その詳細を捕捉するには、統計上の限界があります。

特に、住宅ストックが、何時どのような目的で利活用されたのか、空き家になったのか、などの住宅ストックの動きを捕捉することが難しい状況です。しかしその動きは、住宅・不動産業にとっても重要な情報となります。

よって、弊社では、登記データを活用することにより、売買や相続によるストックの動きを分析し続けています。登記データについても、純粹に「住宅」だけを取り出すことができないなどの問題点もありますが、今後も可能な限り、精度を高めた分析を行って参ります。

また、住宅をストックとして維持していく意義についても改めて見つめ直しております。その一例が、本号でも紹介している炭素蓄積機能です。

弊社では、住生活の質の向上、住宅・不動産業の発展及び地球環境への貢献の視点から、住宅ストックの多角的な分析を続けて参ります。

（小沢 理市郎）